

# 野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第177号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成26年9月21日

ツツドリ（赤色型）



2013. 5. 24 札幌市豊平区西岡公園

撮影者 品川睦生（札幌市南区）

（カラー写真はHPに公開。本誌7頁参照）



# も く じ

鳥類学者、秋の夜長に恐竜を語る  
 森林総合研究所 川上 和人 …………… 2

長万部におけるナベヅル亜成鳥の記録  
 上士幌町 川辺 百樹 …………… 5

釧路でサンコウチョウを撮影 釧路市 青砥 好夫 …………… 6

シルバ通信③ 野鳥の保全と林業を両立させる森づくりとは  
 北海道大学農学院 吉井 千晶 …………… 8

岩崎孝博さんを悼む  
 北海道野鳥愛護会副会長 樋口 孝城 …………… 9

シロハヤブサ飛来する砂崎岬 森町 岩田 真知 …………… 10

表紙の鳥 札幌市 品川 陸生 …………… 11

滝川市でコマツグミを観察 (国内2例目)  
 —「BIRDER」誌 掲載記事の裏話—  
 新十津川町 岸谷美恵子 …………… 12

探鳥会ほうこく …………… 12

探鳥会あんない …………… 16

鳥民だより …………… 16

## 鳥類学者、秋の夜長に恐竜を語る

森林総合研究所 川上 和人

### ・そうだ、恐竜の話しよう

誰しも、一生に一度くらい、エジプト散策中にスフィンクスに謎々を出されたことがあるだろう。もちろん、私もその1人だ。曰く、「<sup>そもさん</sup>作塵生。朝は4本足、昼は3本足、夕方には2本足になる生き物何か」  
 説破。恐竜である。

恐竜は、1824年に初めて論文として発表された。当初、巨大な爬虫類という認識で、四足歩行で復元されていた。その後、前肢に比べ後肢が発達していることがわかり、後ろ足と尻尾で支える三点支持の姿勢で復元されるようになる。さらに研究が進み、尻尾を宙に浮かし、二足歩行と考えられるようになってきた。

もちろん、トリケラトプスなど、四足歩行の恐竜も多数いる。しかし、彼らも、もとは二足歩行の種から進化したものと考えられている。ここでは話の都合上、二足歩行が恐竜の象徴と考えよう。

### ・鳥類恐竜化計画

二足歩行により手を自由に使えるようになり、文明を手にしたことは、人類の自慢の種である。おかげさまで私も、近所を徘徊するネコに相対し、日ごと夜ごとに威張り散らしている。恐竜は、私たち自慢の二足歩行を、遙か二億三千万年前に獲得した大先輩だ。

先輩とはいえ、遠い過去に絶滅している。実にふがいな

い、何か落ち度があったに違いない、そう思う方もいるだろう。彼らの絶滅は、巨大隕石の地球への衝突ゆえと考えられている。直径200キロのクレーターを穿つ爆発的衝撃、津波、200度を超す大気の高温化、続く寒冷化、同じことが起こったら、人間も一掃されることだろう。彼らの落ち度は、月に宇宙基地を築いて逃げなかったことぐらいだ。

しかし、恐竜は実は絶滅していなかったことが、最近の研究により明らかになってきた。ネッシーやモケーレ・ムベンベの話をしていのではない。鳥類が、恐竜の生き残りとわかったのだ。

鳥は、ティラノサウルスを含む獣脚類というグループから、進化したと考えられている。骨学的な特徴の共通性や、羽毛を持つ恐竜の発見など、様々な証拠が、そのことを示している。

私たち鳥類学者は、このような事実を突きつけられ、さもありなんと平静を装っているが、内心は驚きに満ちている。今日は、この動揺を隠すため、改めて恐竜について考えてみたい。

### ・恐竜三原則

さて、恐竜といえば、怖い、大きい、襲われる、という印象が強い。「怖い」は、名前の通りだから間違いない。恐がるのは主観的なものであり、個人の自由として憲法にも認められるところである。

「大きい」も事実である。グーグルで「小型恐竜」と検索すると、まず登場するのが、全長2mのヴェロキラプトルだ。現生鳥類で最大サイズを誇るダチョウの体高が約2mである。これを小型と一蹴するのだから、スケールの大きさがよくわかる。

しかし、3つめの特徴、「襲われる」については、あまり根拠がない。行動は化石に残りにくいからだ。もしかしたら、なれなれしくて、マッシュマロ好きな恐竜もいたかもしれないが、マッシュマロも心の機微も化石には残らないのである。

行動と同じく、化石に残りにくいのが、筋肉や皮膚などの軟部組織である。しかし、図鑑の恐竜には、色が着き、躍動感あふれる姿を示している。このような外見や行動が、化石証拠に残ることは少ない。描かれた姿は、多くが推測に基づいているというのが現実である。

鳥が恐竜の子孫とされるまで、恐竜に最近縁な現生動物は、ワニと考えられており、恐竜の復元にも参考となっていた。たとえば、昭和の図鑑では、恐竜は茶色や緑などの地味色が定番だ。これも、ワニからの解釈が影響していると考えられる。

しかし、最近の図鑑では、カラフルな恐竜が、続々と登場する。鳥の特徴である豊かな色彩を、恐竜も持つであろうと、考えられるようになってきたのだ。鳥から恐竜の姿や生活を推定することが許されたのだ。

#### ・着せ替えサウルスの正体

図鑑を賑わすきらびやかな色彩には、必ずしも根拠があるわけではない。先述の通り、体色は化石に残りにくいのだ。

ティラノサウルスは人気があるため、多くの恐竜本に登場する。しかし、各々の姿を見比べると、緑、赤、黄、シマシマ、同じ種と思えないほど、色が異なる。これでは、野外でティラノサウルスに出会ったとき、種の識別ができなくて困るだろうと心配になる。

確かに鳥の色彩は多様だが、必ずしもランダムではない。例えば、カモメやアホウドリ、ペンギンなどの海鳥は、白黒のメリハリのある体色を持つ。光を遮るものがなく、照り返しの強い海では、繊細な配色は役に立たないためと考えられる。体色のパターンにも、意味があるのだ。

ならば、恐竜の体色にも、なんらかのパターンがあるだろう。せっかく鳥が恐竜の一味とわかったのだから、鳥の知見から、ティラノサウルスの体色を推定してみようではないか。

#### ・正しいティラノの過ごし方

ティラノサウルスは、泣き叫ぶ美女に容赦なく襲いかかる捕食者だ。鳥類で言えば、タカ類に相当しよう。タカ類は、茶褐色や灰褐色をまとう色彩的には地味なグループである。また、腹側を見ると白色のものが多い。真っ赤や

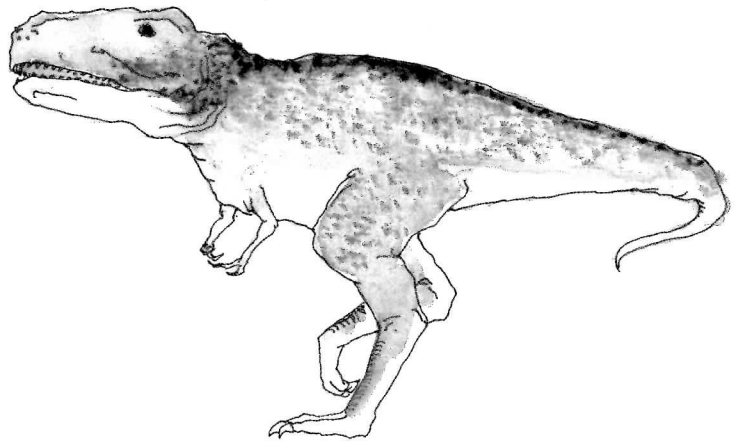


図1 ティラノサウルスは、おそらく地味な褐色。せっかく描いた絵を、カラーで見せられないのが残念でしょうがない。

真っ青のタカは、どうやらいなさそうだ。

大地も植物も、しばしば茶色く、自然は褐色にあふれている。このため、タカ類の褐色は、陸上の自然を背景としたカモフラージュと考えられる。また、白い腹も、存在を目立たなくする効果を持つと考えられる。影がでしやすい腹側を白くすることで、全身の色の変化を抑え、目立たなくすることを、カウンターシェーディングという。タカ類は、自然界で目立ちにくい羽色を、進化させてきたと考えられる。

獲物は、文字通り命がけで身を隠すため、地味な色の動物が多い。一方で捕食者も、獲物に逃げられないよう、警戒されにくい保護色が発達しやすい。両者は、お互いに姿を隠すため、だまし合いの進化をしているのだ。

そう考えると、捕食者であったティラノは、森林や大地に溶け込む褐色にちがいない。腹側はやはり白がよからう。ただでさえ大きくて目立つので、カモフラは重要だ。濃い単色は目を引くので、マダラの褐色でいこう。次に図鑑を描く機会があったら、この色がお奨めである。

#### ・正しいスピノの過ごし方

ティラノサウルスよりさらに大きい捕食者として、スピノサウルスがいる。前者は小型恐竜などの陸上動物を食べていたと考えられているが、スピノサウルスの仲間は、魚をよく食べていたと考えられている。

陸上動物相手と、魚類相手では、保護色の塩梅も違うだろう。今度は、陸地で生活しながら、水中の魚を食べる鳥を参考にしてみよう。サギ類、コウノトリ類、トキ類などが、候補である。

彼らに共通するのは、主に白と黒が基調になっていることだ。水中から見上げた水面は、散乱による白色光と、逆光中の黒い影が散らばる世界だ。このような状況では、白や黒が保護色になるのかもしれない。

一方で、白や黒は、陸上では目立つ色である。これらの鳥は、群をよく作る。目立つ色は、集合にも役に立つ。群

は、食物を効率よく探索したり、捕食されるリスクを軽減したりするための、戦略の1つと考えられている。

スピノサウルスが、群を作っていたかどうかは、定かではない。しかし、単に魚食性というだけでも、彼らを白黒に描く価値は高い。体長15mにもなるスピノサウルスが、白地に黒のパンダ模様で水辺に佇む姿など、想像するだに愉快だ。

### ・正しい鳥の過ごし方

鳥類に関する知見が、恐竜を考えるヒントとなることは間違いない。逆に、鳥類を考える上でも、恐竜との類縁関係は興味深い。

二足歩行は、恐竜だけでなく、鳥類の特徴の1つだ。鳥だけを見ると、前肢を翼として使うため、二足に進化したようにも見える。しかし、化石証拠からは、二足歩行の恐竜から鳥類が進化したと考えられる。つまり、飛ぶために二足になったのではなく、先に二足歩行する恐竜がいたからこそ、鳥は空を飛ぶように進化できたと言えるのだ。

これまで、日本の鳥学者と恐竜学者の間には、余り接点がなかった。しかし、両者が知恵を共有すれば、ともに新たな視点を獲得することができるはずだ。そこでは、鳥の観察をしている方々の知見も、大いに役立つはずである。

さて、ティラノもスピノも、実際に何色だったのかはわ



図2 スピノサウルスは、パンダ模様でどうだろう。ちょっと愉快的な感じである。

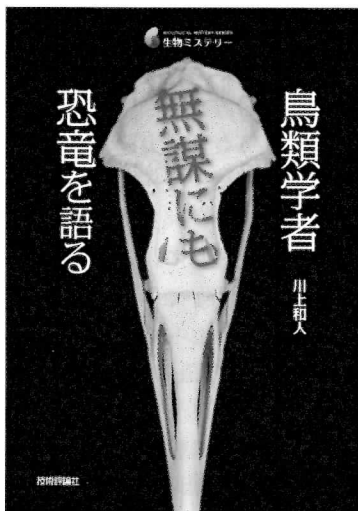
からない。極彩色だった可能性も、まだ否定できない。同じ魚食性でも、カワセミ類が白黒でないことを考えると、まだまだ、考察の余地がありそうだ。

思索の秋の夕べ、エジプトまで行かずとも、鳥の図鑑を見ながら、恐竜世界の再構築を試みるのも、また鳥類の愉しみ方の一つである。

### プロフィール

### 川上 和人

森林総合研究所主任研究員。小笠原の鳥類を中心に、生態や保全の研究を行っている。今気付いたが、本文で例示したネッシーは、恐竜ではなく、首長竜の仲間だった。失敬、失敬。混同されることもあるが、彼らは別系統の爬虫類である。なお、モケーレ・ムベンベは、恐竜なので、安心してほしい。



「鳥類学者 無謀にも恐竜を語る」  
川上和人著 技術評論社刊 1880円(税抜)

主な著書：「外来鳥ハンドブック」(文一総合出版)、「鳥類学者 無謀にも恐竜を語る」(技術評論社)

読書は、ギャンブルである。賭けるのは、時間と代金。情報は、タイトルと表紙と著者名。面白いかどうかは、読んでみないとわからない。読者の目利きが試される。

さて、最近の古生物研究は、鳥類が恐竜の生き残りであることを示してきた。つまり、鳥類は恐竜の一部である。おかげさまで、私たち鳥類学者も、恐竜を研究しているのだと、鼻高々に語るできるようになった。

恐竜の弱点は、その本当の姿が不可知であることだ。このため、最近の恐竜研究では、鳥類の研究成果を応用しての推定が行われている。一方、鳥類の弱点は、恐竜に人気負けしているところだ。

そこで、恐竜人気の尻馬に乗り、鳥類学者の威信を無断で賭けて、鳥学に基づく恐竜世界の復元に挑戦したのが、この本である。挑戦の結果は、読んで確かめてみてほしい。全国書店にて、絶賛発売中である。

ただし、読んで損をしても、その責任は読者自身にあると、心して臨んでもらいたい。本屋はカジノ、君はギャンブラーだ。くれぐれも、私の悪口は謹んでくれたまえ。それが、紳士淑女の流儀だ。

# 長万部におけるナベヅル亜成鳥の記録

上士幌町 川 辺 百 樹

2014年5月12日9:20~9:47および5月13日12:15~12:45に長万部町字静狩の16号農道わきの畑地(北緯42°33'20.55" 東経140°25'9.48" 標高5m)でナベヅル亜成鳥1羽を観察しました(写真)。観察中、このツルは農家のすぐ近くの去年刈り取られたデントコーン畑とブラウをかけてまもない畑を歩き回りながら採食していましたが、何を食べているかはわかりませんでした。

文献・新聞記事・インターネットなどで私が知り得た北海道でのナベヅルの記録は、今回を含め27例でした<sup>1)</sup>。1996年と2009年が各8例と際立って多く、1997年から2008年までが4例、2010年以降が3例、そして1995年以前は1874・1980・1981・1992・1994年に各1例あるだけでした。ナベヅルは1990年代以降、北海道でしばしば観察されるようになったといえそうです。このような流れの中で、今回の私とナベヅルとの出会いがあったということでしょう。

1) 主な参考資料

平田和彦・伊藤元裕.(2013) 北海道天売島におけるナベヅル *Grus monacha* の観察記録. *Strix* 29. 127-129.



ナベヅル亜成鳥 2014. 5. 12 長万部町

北海道野鳥愛護会広報部.(2010). ツクシガモ(小樽市銭函)とナベヅル(余市町)の飛来. 北海道野鳥だより 160.11.

藤巻裕蔵. 北海道鳥類目録・改訂4版の補遺

(<http://www16.ocn.ne.jp/~bonasa/list.html#gru>)

石狩鳥類研究会. 石狩管内野鳥年次記録

(<http://www12.plala.or.jp/ishikarichoken/13nenji.pdf>)

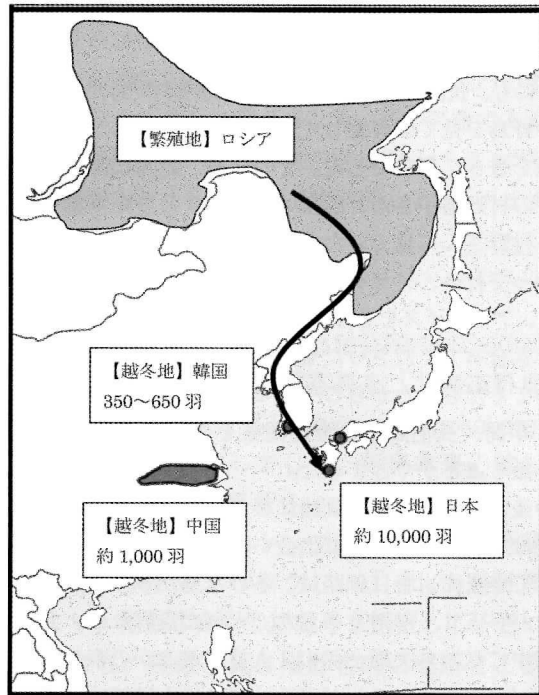
## 【広報部から】

ナベヅルの個体数は全世界で11,500~12,000羽と推定されており、極めて少ない鳥の一つです。国際自然保護連合(IUCN)および環境省のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

図に示すように、東シベリアから沿海地方で繁殖し、越冬地は日本(鹿児島県出水地域、少数が山口県周南市)、中国、韓国です。特に鹿児島県出水市では、長年の給餌等の保護活動により、近年の総飛来数は10,000羽を超えており、全体の8~9割が越冬します。

一方、一極集中化することにより、感染症発生等による種の絶滅の危険性も危惧されています。このため環境省等は日本野鳥の会等の協力のもと、ナベヅルを他地域へ越冬分散させようとしています。まずは佐賀県伊万里湾に面した干拓地への移動の試みが行われています。

ナベヅルの名は、胴体の羽衣が煤のついた鍋の色(灰黒色)のように見えることに由来しています。



ナベヅルの生息分布。国際自然保護連合(IUCN)レッドリスト2012年版をもとに作成。

## 釧路でサンコウチョウを撮影

釧路市 青 砥 好 夫

今年(2014年)5月30日に釧路市浦見にあるわが家の裏の林に出現したサンコウチョウを写真撮影し、それが翌31日の北海道新聞釧路版に掲載されました。私の野鳥観察、撮影歴などを振り返りながら報告させていただきます。

私が幼きころ、オホーツク海から10km内陸に入る山の中に家があり、盛んに鳴く野鳥の声を聞いて育ちました。しかし、それが何の鳥か、どんな鳥なのかは全く知らずに過ぎ、それから約50年を経て東京を中心とした生活から北海道に戻り、長沼町に自宅を構えた時から野鳥の写真に魅せられていきました。長沼町は札幌や新千歳空港に近く、雪も割合少なく、その上自然豊かな所ということから、長沼温泉のすぐ近くに老後の住まいを決定しました。

その長沼へ本州から引っ越してきた2004年の4月、外を見ていた家内が「今何か白と青の格子模様のすごくきれいな鳥が飛んでいったよ」と言った時から夫婦そろって野鳥に魅せられて今日に至りました。家内は三重県松阪育ちで、長沼に来た時、野鳥に関しては殆ど無知でした。アオバトが遠くで鳴いていると、「犬の遠吠えが聞こえる」というので「あれはアオバトという鳥だよ」と教えると、「へえ、鳥なの?」と、なぜか、ただただ感動していました。また、ある時は鳩時計と本物のカッコウの鳴き声を混同し、それを修正するのに時間がかかりました。そんなふうにして私たち夫婦の野鳥観察が始まりました。

幸いにも、長沼は山や林、沼などに恵まれて野鳥も多く、新しい野鳥を見ては興奮して写真を撮り、図鑑で調べ、観察記録を書き、夢中でした。そのころ、野鳥に詳しい、野幌在住の村野道子さんと出会い、カワラヒワの写真を撮っては、村野さんに見ていただき、アオジを撮ると、また確認に持って行き、ノビタキを撮ると感激して持って行くなどして、アドバイスをもらって喜んでいました。今思うと、よく付き合ってくださったものだ、感謝です。そういう方がいてくださったからこそ、ビギナーでありながらも、その1年間、長沼周辺の野鳥観察を楽しみ、約70種類の写真を撮ることができました。

その後、仕事の関係で釧路に移り、今日に至りますが、釧路ではまた新しい野鳥に出会い、ますますその奥深さを痛感しています。特に釧路は、冬の水鳥が多く、さらに写真のレパトリーが増えました。天気良ければ、土曜日の午前中に私たち夫婦と孫の3人で、どこかの森や湿原、港などバードウォッチングドライブに出かけています。新しい野鳥に出会って、写真が撮れたときの感激は一つ一つ心に刻み付けられています。デジカメで撮り、自分でプリントするようになってから、ようやく人に見せられる写真

になってきたかなあと思えるようになりました。デジカメですと、チャンスがあれば何枚でもシャッターを押し、その中から選んで自分でプリントし、自由にトリミングできるからです。そして思うことは、人間の目よりもカメラの方が遥かにしっかりと野鳥の美しさを捉えてくれるということです。



サンコウチョウ 2014.5.30 釧路市

そんな私たちに思いがけない出会いが与えられました。今年5月30日朝、台所の窓から何気なく外を見ていた家内が、急に双眼鏡(わが家では、いつでも使用できるようにテレビの横に置いてあります)を手に取り、興奮気味に、「ちょっと、あれ何? 見かけない鳥!」と言い出しました。私も見に行くと、確かに、頭が黒く、体の茶色い鳥がしきりに枝から枝へと飛び回っていました。とにかく動き回るので、確認するのが難しいのですが、双眼鏡で見ると、目の周りと嘴がコバルトブルーです。「これはサンコウチョウだ!」と、すぐ思いましたが、まさか釧路に!しかも家の裏の土手の林に?とてもそんな所にいるとは思えませんでした。とにかくカメラを持って行くと、用心深く、すぐ遠ざかっていきます。その場にじっと待っていると、少しずつ近づき、さらに15分ほど待つと、かろうじてカメラのエリアまで来てくれて、夢中で5、6枚シャッターを切りました。しかし、その後は、すっかり姿を消してしまいました。「だめだったか…」と思いながら、プリントしてみると、その中から4枚ほど、サンコウチョウと分かる写真が撮れていて、びっくり!家内と興奮して写真を見たことはもちろんです。早速、深津恵太さんという、釧路在住の野鳥調査員で、道東の野鳥観察をしておられる方に電話をすると、すぐ来てくださいました。写真を見せると、「これは珍しい鳥で、北海道では初めての観察写真ですよ!」

と言って、知り合いの専門家に確認し、北海道新聞にも連絡を取っていただきました。

何年前かに、本州の野鳥写真家がたくさんの野鳥の写真を私に送ってくれたことがあります。その中にあったサンコウチョウの写真を見て、野鳥図鑑で調べたりして、「本州ではこんな鳥がいて、写真も撮れるんだ」と感心して見ていました。その時、雄のサンコウチョウは体の何倍もある尾がありましたから、今回サンコウチョウの写真を撮ることができましたが、「北海道でもこんな寒い釧路で?」と思っただけで、写真として素晴らしい写真が撮れたとは思えませんでした。朝8時ごろの釧路で少し霧がかかっている中での撮影でしたので、満足とはいきませんでした。ところが、深津さんがしきりにあちこち電話して連絡を取っておられるのを見て、「北海道では貴重なのかなあ」と思い始めたくらいです。

道新に載った時、家内は「私が最初の発見者ですからね」と、満足げでうれしそうでした。



サンコウチョウ（同一個体の後ろ姿）

野鳥の写真撮影を続けて10年経つと、よく見られる鳥はだいたい撮ったように思えて、新しい鳥に出会うのはもう難しいのではないかという気がしてしまいます。けれど野鳥観察は奥が深いです。今回のように、予期せずに思いがけない時に未知の野鳥に出会って感動を与えられたり、また、雄か雌か判断がつかなくなったり、幼鳥となるともつと分からなく、成鳥とは全く異なる姿の場合もあり、驚きの出会いもあったりします。時には子どもを守る親鳥の勇気とたくましさ、けなげさに触れ、「婚活時」の雄同士のすさまじいバトルに目を見張ることもあります。ある時、私がカメラを手に散策をしていますと、普段はすぐ遠ざかるアカハラ2羽が、私の足元に来ているのにも気づかず、すさまじいバトルを続けています。そのうち1羽が気づいて逃げてしまいましたが、もう1羽は嘴を開いてハアハアあえぎ、目は血走っていました。ようやく私の足元にいることに気づいて、ふらふらと飛んで行ってしまいました。鳥の世界もいろいろドラマがあるのだなあ、野鳥観察の奥深さに日々出会い、楽しんでおります。

### 【広報部から】

「日本鳥類目録改訂第7版」（日本鳥学会）では日本で見られるサンコウチョウとして亜種サンコウチョウと亜種リュウキュウサンコウチョウの2亜種を記載しています。今回、釧路で撮影された個体は亜種サンコウチョウと見られます。亜種サンコウチョウは、本州から九州、対馬、屋久島、韓国で繁殖し、東南アジア、マレー半島、中国南東部と時折、スマトラ島で越冬します。ウスリー川流域でも記録され、まれに北海道で観察されます。

道内での記録は「北海道鳥類目録改訂第4版」（極東鳥類研究会）によると1887年、1990年、2002年にあります。1887年の記録は「日本鳥類目録改訂第5版」に「北海道は一度の観察記録（1887年函館）があるのみ」と書かれているだけ。1990年の記録は白老町ポロト湖畔で当会会員、本多進さんが同年6月4日にビデオ撮影しました。「幼い雌と思われる」と「北海道野鳥だより」81号にあります。2002年の記録は、釧路市立博物館に当時勤務されていた橋本正雄さん（現在は音更町在住）が釧路市春採湖畔で6月16日に開催された探鳥会で雌2羽を観察、写真はないものの複数の人が確認しているとのこと。今回の観察地、釧路市浦見にも近いため、興味深いところ。以上の記録はいずれも写真付きの印刷物になっていないため、今回の写真は北海道で初めてサンコウチョウを撮影した写真として貴重な記録かと思われます。

また今回の個体の雌雄については、道内の多くの方からご意見を賜りました。雄の特徴である長い尾は見られませんが、尾の短い雄もいることから、雌成鳥または若い雄の可能性が高いと思われます。

### 【お知らせ】

今号から、本誌掲載写真を「北海道野鳥愛護会」ホームページ(<http://www.aigokai.org>)に掲載することにしました。野鳥本来の美しい姿をカラーでご覧下さい。

ホームページのトップ画面左側の「野鳥だより」タグをクリックし、「『北海道野鳥だより』掲載写真」の掲載号を選択して下さい。

なお、掲載写真は撮影者のご理解とご協力のもと掲載しているものです。当該写真の無断利用は、ご遠慮願います。

シルバ通信③

# 野鳥の保全と林業を両立させる森づくりとは

北海道大学農学院 吉井千晶

日本は、国土の7割が森林に覆われた森林大国として有名です。しかし、そのうちの約4割が木材を生産するために終戦後に植えられた人工林であることはあまり知られていません。日本は、国土の約3割が人工林に覆われた人工林大国でもあるのです。終戦から約70年たった今、これらの林は「伐り時」を迎える一方で、人材不足や安い輸入木材の影響で国内では林業活動が停滞しているのが現実です。このような背景から、近年、日本では「林業をさかんにしよう」という動きが活発になってきました。

北海道ではトドマツやカラマツといった針葉樹による人工林が林業の場です。このような人工林はククイタダキやヒガラのような野鳥たちが数多く生息しています。しかしながら、キビタキやオオルリなどのヒタキ類やアカハラ、クロツグミ、ミソサザイ、アオバトなどといった森の鳥たちはあまり生息していません。広葉樹林の方が鳥が多いという印象は誰しもが持っていると思います。森の鳥を見たい時には原生的自然が残る天然林や、広葉樹が多い公園などに行く人が多いのではないのでしょうか。世界的に「野生生物を守ろう」という動きが活発になっている今、野生動物を守りながら林業活動をも活気づける方法が求められているのです。

それでは「林業活動をしなが野生生物を守る」にはどうすればよいのでしょうか？その方法は主に2通りに分けられます。1つめは、同じ土地(Land)で生産と生物の保全を同時に行う(shareする)ものです。この方法はLand sharing(以下シェア)と呼ばれています。たとえば森林では、木材となる針葉樹の間に広葉樹を植える、もしくは元々生えていた広葉樹を残しておくなどして人工林の中に鳥の食卓とすみかを与え、「鳥にやさしい林業」をすることが

挙げられます(図1)。もう1つの方法は土地を「生産の場」と「保全の場」を完全に分ける(spareする)、Land sparing(以下スペア)という方法です。この方法では、「生産の場」では生産上邪魔となる広葉樹をすべて切って除き、下草は刈り払い、木材にするための針葉樹を一面に植えます。一方で「保全の場」では原生的な手つかずの自然をそのまま残して保護します(図2)。広葉樹林が少しでも混じった針葉樹人工林に広葉樹林と同等の鳥が生息するのなら、林業活動をしなが鳥たちを守るにはシェアの方が効果的だと考えられます。一方、広葉樹がたくさん混じらないと鳥が増えないようなら、シェアするには木材生産を犠牲にしなければいけないのでスペアの方が優れていると言えるでしょう。

支笏湖の東側から千歳の市街地の間には大規模なトドマツ人工林・アカエゾマツ人工林が広がっています。私はこの広大な人工林の中から、針葉樹のみの人工林・少し広葉樹が混じった人工林・ほとんど広葉樹ばかりの人工林など、様々な広葉樹の混ざり具合の人工林を25カ所選び、鳥と樹木の調査を行いました。この調査の結果から支笏湖周辺での林業を活性化しながらそこに棲む鳥たちを守るには、シェアとスペアのいずれの方が良いかを明らかにできると考えたためです。

調査の結果、針葉樹だけのところでは予想通りククイタダキ、ヒガラが多く、他にはエゾムシクイがよく観察できました。広葉樹が少し混じった森林ではそれらに加えてシジュウカラなどのカラ類、アオジ、アカゲラ、センダイムシクイなどが観察されました。広葉樹ばかりの人工林では、さらにキビタキ、イカル、アオバト、クロジ、場所によってはクマガラなどの約40種もの「森の鳥」を観察するこ



図1 Land sharing



図2 Land sparing

図1, 2 : Land sharingとLand sparingの森林での概念図。一般に「有機栽培」と呼ばれるものは、Land sharingを農地で行ったもの。



とができました。この観察できた鳥たちを、①木の上で餌をとる鳥（センダイムシクイなど）、②樹洞を住みかとする種（カラヤキバシリ・キツツキ類）、③林内を飛び回って餌をとる種（ヒタキ類）の3つのグループに分け、これらの広葉樹林を主に住みかとする鳥たちが、人工林内の広葉樹が増えるにつれてどのように増加しているかを調べました。

その結果、3つのグループすべてが、ある量の広葉樹があれば激増するわけでも、広葉樹がたくさんないと増えないわけでもなく「広葉樹が増えるとともに徐々に個体数が増える」というものでした。つまり、支笏湖周辺の人工林ではシェアでもスペアでもあまり変わらない、というものでした。

では、このような場合はどのような森林づくりをすればよいのでしょうか。土地の利用の方法は、生物の保全と生産のみで決めることができません。現実には、土壌の質・傾斜・気候などの要因（人工林を造るのに適するかどうか）、経済的な要因、その土地の持ち主の意向が大きく影響してきます。生物の保全と資源生産だけで土地利用方法をきめられない場合はこのような要因を重視すべきだと言えるでしょう。「生き物にやさしい森林」で生産した商品の方が売れるということからシェアを選ぶ人もいるかもしれませんが、作業効率やコストを考えるとスペアの方がよいとする

考えもあるでしょう。

話が少し逸れますが、「バードフレンドリーコーヒー」というものも最近よく見かけます。全国チェーンの某コーヒーショップもバードフレンドリーコーヒーを扱っているそうです。これも“シェア”の一つの形です。単なるコーヒーのみの農場でなく、元々ある熱帯の森林の木陰にコーヒーの木を植えることによって、「野鳥も休息できるコーヒー農場」で生産したという付加価値をつけているのです。また、バードフレンドリーコーヒーから得られた収益の一部は研究機関に寄付され、鳥類の研究に役立つということで、このコーヒーは更なる付加価値をつけているようです（参考 <http://www.bird-friendly-coffee.jp/>）。コーヒーが“木陰で育つ”という性質をもっているからバードフレンドリーコーヒーという“シェア”の形ができるのであって、明るい場所でないとうたない樹木や作物だとどうもいかないかもしれません。

今まで行われてきた“シェア”“スペア”をめぐる研究では、シェアが優れるという結果のものとスペアが優れるという結果のものが複数ずつ存在します。シェアとスペアのどちらが良いのか白黒つけるのではなく、その土地土地に応じてフレキシブルに考えることが大切なのかもしれません。

## 岩崎孝博さんを悼む

北海道野鳥愛護会副会長 樋口孝城

平成14年度に総務幹事になられて以来、代表幹事や総務幹事代表を務められてきた岩崎孝博さんが、7月26日にご逝去されました。満70歳でした。

数年前に胆管がんを患われましたが、外科手術により一旦はほぼ完全に回復し、愛護会での活動は引き続き熱心に行っていました。でも、がんはあちこちに転移していたようです。昨年後半あたりから体調を崩すことが多くなり、抗がん剤投与もむなしく、とうとう帰らぬ人となりました。

本当に良い人でした。労を惜しむことのない人でした。いつも笑顔を絶やさず、一生懸命に愛護会に尽くしてくれました。総務関係の仕事は随分と忙しく、また想像以上に気を使うことが多かったでしょうが、岩崎さんの口から愚痴や他人批判などの言葉が出たことは、おそらくなかったのではないのでしょうか。もちろん野鳥は大好きでしたが、それ以上に人間が大好きだったようです。

愛護会の仲間が十数人ほど集まってここ10年来

行っている道民の森での「お泊まり探鳥会」のマネージメントも熱心でした。今年も6月初めに行いました。以前に比べると体力は随分と落ちてきていたようでしたが、その時には、これが岩崎さんにとって最後の「お泊まり探鳥会」になるとは夢にも思いませんでした。

岩崎さん曰く「町内探鳥会」も、町内会の人達を誘って行っていたそうです。お住まいは北区あいの里で、宅地化が進んだとはいえ、まだまだ自然も残されています。毎年春になると、「今年もオオジシギが来た」と嬉しそうに言っていました。

お酒も大好きでした。愛護会幹事会の後は飲み会となるのですが、それが何よりも楽しみだったみたいです。私は北区拓北なので、かなりの酩酊状態で一緒にJR学園都市線に乗るのですが、乗っている間中、野鳥のこと、愛護会のことなどを話し続けているのが常でした。

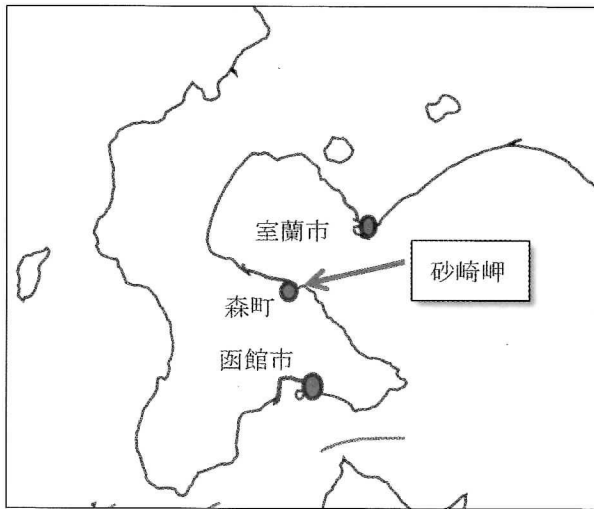
岩崎さんの思い出は山ほどあります。良い思い出ばかりです。今の時代、70歳というのはまだまだ若いと言わざるを得ません。お元気であればこれからもずっと愛護会を背負ってくれる人の一人だったはずですが、本当に惜しい人を亡くしました。心よりご冥福をお祈りします。

# すなごきみさき シロハヤブサ飛来する砂崎岬

森 町 岩 田 真 知

2013年11月、道南・噴火湾に面した森町砂崎岬に、久しぶりに1羽のシロハヤブサ幼鳥が飛来しました。

かつて（1992年から93年にかけての冬）中間型、淡色型のペアが飛来し、一躍脚光を浴びたこの岬には、その後10年にわたって暗色型を含めた幼・成鳥が毎年飛来し、私たちを楽しませてくれました。



砂崎岬位置図

私はこの鳥を毎年、撮影してきましたが、後半はいささか飽きたのと増えてきたアマチュアカメラマンとのトラブルがいやになり、現場に出かけることが少なくなりました。そのうちシロハヤブサの情報を聞かなくなり、2000年を過ぎたころからは飛来を確認できなくなりました。

特に大きな環境の変化はなかったのですが、カモメなどの狩り場だった町営牧場が廃業し、ブッシュや灌木が生えてきたのと、灯台付近に小屋や人工物を設置したのが影響したのかもしれませんが。

ここでの狩りの対象はオオセグロカモメが中心で、コウミスズメ、エトロフウミスズメ、ウミガラスや海ガモ類なども捕食していました。1987年ころ、私が最初にこの鳥（中間型幼鳥）の狩りを見たときは、海の方からコウミスズメを追いかけ、牧場の草地に蹴落としました。その後、すぐ食べることはせず、放り投げてはまたつかむというようなことをしていました。

今回飛来した幼鳥もオオセグロカモメ中心に狩りをしていましたが、トビを襲うことも多くあり、その持っていた魚類の残滓を奪い、海岸のお気に入りの場所で食べていました。この個体は警戒心が極端に少ないというか…むしろ摂食等の場合、人間の近くで行うことが多く、

カラスなどの接近を防ぐために利用しているのではないかとされるケースもありました。

一応、接近しすぎるカメラマンなどには注意はするのですが、この鳥のほうから数メートル前の流木に飛んできてもあり、こちらが慌てて離れるということもありました（こちらから近づいたと勘違いされても困るので）。

この岬はカラスやトビが多く、コミミズクはあまり見かけないのですが、2013年から14年にかけての冬はこの幼鳥に追われているケースが多々あり、結構いるんだと、再認識しました。確認されただけで3羽が捕食されています。

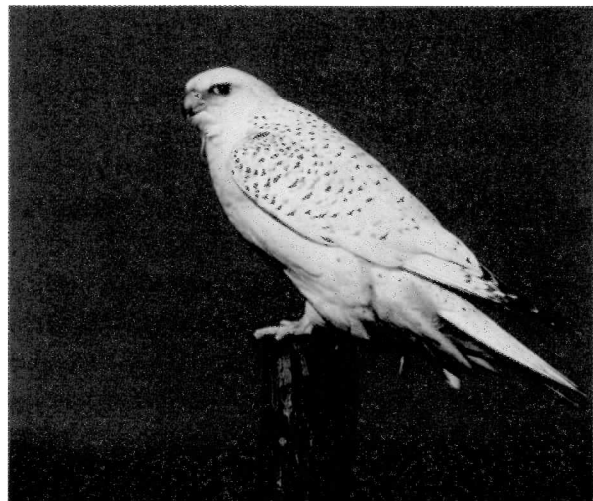
13年～14年の冬は小鳥類が多く、渡島半島南部ではベニヒワの数千の群れとかの情報もありましたが、岬周辺でもベニヒワ、イスカを多く見かけました。

また、シラガホオジロの群れが長く滞在したので、この群れにシロハヤブサが突っ込むのも何度か目撃しましたが、捕食したかどうかは確認していません。13年～14年冬はユキホオジロ、ツメナガホオジロが定着せず、残念なシーズンでした。取り付け道路ではシベリアジュリンが採餌しているのをよく見かけました。

以前にはハマヒバリなども飛来しており、付近のゴルフ場ではシロフクロウ、鹿部町では亜種シロオオタカも記録されているので、こういう猛禽類とシロハヤブサとのバトルも期待されますが、どうでしょう？

猛禽といえば、ハヤブサ、ケアシノスリも多く見かけました。特にハヤブサはシロハヤブサと同じような場所で狩りをしているので、両方出ているときはカメラマンも二分されていました。

昔と違ってアマチュアカメラマンの多いご時世ですので、



1992年から93年にかけて飛来した淡色型



1995年に飛来して砂崎の鳥居に止まる中間型、淡色型のペア  
 いろいろな問題が発生しています。それまで自然や野生などに興味も関心もなかった人間が、ただ「いい写真」という訳の分からない価値観…それが「構図」や「珍しい瞬間」とかなのか、単なる写真技術なのか、珍しい被写体とかなのかはよく分かりませんが…その写真を発表（地域での啓蒙活動、ブログ、写真展、写真集など）することによる貴重な動植物、生息環境への理解と啓発とかを考えている人は、ごく少数、というかまづいません。大半は仲間が集まっての自画自賛。いい写真撮ったとか言って見せられるのが、「やらせ」や繁殖に影響のあるようなものだったり、写真的に見るに堪えないものが大半。

撮影や観察、調査、研究含めどれも野生たちにとって心地よいものではありません。人間の勝手な行為で迷惑をかける以上はその被写体の保護や生息環境を守り、啓発する活動で恩返しをする。それが当然だと思います。

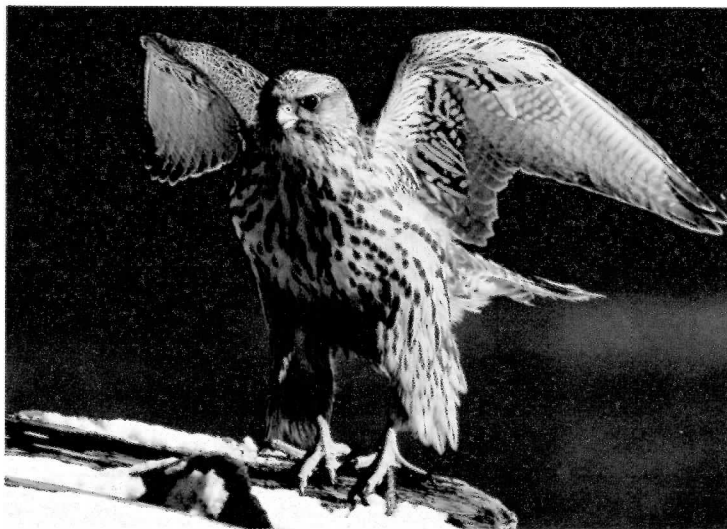
砂崎岬でも、野生や自然に対する思いやりのない行為を目にすることもありますが、

そういう場合はすぐその場で注意するようにしてください。よく後になってから、「こういうけしからん行為を見た」と、お怒りの電話やメール等をして下さる方がおりますが…私は現場を見ておりませんし、こういう人たちの身内でもなければ保護観察者でもないの…。犬や馬でも後から他人に怒られたのでは何のことか分からないでしょうし、誤解もあつたりしますのでよろしくお願ひいたします。

先日久しぶりに砂崎岬を歩きましたが、センダイハギが咲き乱れるも夏鳥の姿は少なく、「夏草や つわものどもが 夢のあと」というような感じで、この冬の喧騒が夢のようでした。

次の冬は、よりきれいになったこのシロハヤブサが飛来してくれることを期待…したいような、したくないような…。

まあ、来てくれたら、みんなで楽しく鳥見しましょう！  
 (いわた・まとも 森と海の情報センター代表)



2013年から14年の冬に飛来した中間型の幼鳥



ツツドリ (赤色型)

### 表紙の写真

2013年の西岡公園はキビタキ・オオルリ・イカル・コルリ・ムギマキなどが多く見ることが出来ました。これらの鳥を写すべく公園に行くと、知人が「ツツドリの赤色型が来ている。少し待てば来る」との事で、しばらく待っているとツツドリの赤色型が現れ芝生に降りて何か餌を食べていました。この個体は5日ほどいたそうです。その後は公園内の芝生広場で餌を食べる姿を見ることが出来ました。

品川 睦生 (札幌市南区)

## 滝川市でコマツグミを観察（国内2例目）

—「BIRDER」誌 掲載記事の裏話—

新十津川町 岸谷 美恵子

はじめに、BIRDER誌掲載はH氏（北海道野鳥愛護会の知人として登場）とI氏の助言と協力がなければ成し得なかった事です。

2014年2月7日午後スーパーの駐車場の街路樹に西日に照らされて胸のオレンジ色が輝いて見えた鳥がいました。大きさからツグミ＝ハチジョウツグミと思い込んでしまったのです。家にカメラを取りに戻りもう一度来てみた。少し歩いて探してみたら民家の木に止まっていた。警戒心はそれほど強くないように思えた。ナナカマドの木のすぐそばに車を止めて待つこと



コマツグミ 2014. 2. 7 滝川市

数分。目の前に何度か来てくれました。車から出ると逃げられるので、写真はフロントガラス越しです。その時の私の心境は、とりあえず撮ることだけでした。夜、画像を見てみたが、ハチジョウツグミではなかった、アカハラ、マミチャジナイでもなかった。少し焦った。でもツグミで間違いはないはず、インターネットで世界のツグミを開いたらずらーっと名前が出てきた。その中から適当にポチっと開いて何度目かにコマツグミを開いた。これだ！しかし、これが、どうなんだ？日本の図鑑には名前も出てないし。困った。もう夜の10時も過ぎていたので携帯のメールでH氏に連絡してみた。翌日H氏から電話があり画像を送ることにした。と言っても私はパソコンは全くダメで、たまたまパソコンに詳しいK君が来ていたので送ってもらいました。結果、コマツグミで問題ないだろうと言うことになり、H氏とI氏より記録として残すようにすすめられてI氏の力添えでBIRDER誌に載せてもらうことになったのです。私はコマツグミを見て、写真を撮って、その時の事を書いただけです。あとは全てH氏とI氏、BIRDER誌のN氏そしてK君が手助けをしてくれたのです。私ってなんてお気楽な幸せ者でしょう？こんな素晴らしい機会を与えて下さった皆さんに感謝しています。



### 十勝方面(宿泊探鳥会)

2014. 5. 10~11

札幌市厚別区 早坂みどり

5月10日・11日、十勝宿泊探鳥会へ参加しました。天候にも恵まれ、楽しい2日間でした。7年前にも訪れたのですが、憶えている所とそうでない所があり、1日目の昼食を食べた松久園の建物は憶えていました。その庭の松の植え込みの中に濃い桃色の鳥を見つけたのですが名前がわからず、夫に確認してもらったところ紅色と尾のふちの白い線などの特徴からベニマシコの雄とわかり、初めて間近で見ることができてうれしく、また、同時に名前もわかりスーッとしました。

湧洞沼の海岸では、波間に浮かぶアビとオオハムを見ることができ、種類は違いますが、以前、カナダのエメラルド湖で、水かさまで見えるほど近くで見たハシグロアビを思い出しました。とても気に入って「デコイ」と「鳴

き声が出るぬいぐるみ」を買ってきたほどです。家に帰ってきてから久々に鳴き声を聞きました。

2日目は、体感温度のテストを受けたような寒暖差の激しい一日でした。朝霧の中での早朝探鳥、野鳥たちも寒そうでした。十勝太やトイトッキ浜では陽射しも出て、ゆっくりカモやシギの仲間、オオジシギやノビタキなどの鳥を見ることができました。午後、気温が上昇した中で、エコロジーパークでの探鳥となりました。暑い中歩いたご褒美に、モズを見ることができました。

札幌駅への車窓の夕日はとても美しく今回の探鳥会を締めくくりにふさわしいものでした。

参加された皆さん方がとても活動的で元気そうでした。私たちも健康に気を付けて、次回もぜひ参加したいと思います。最後に幹事のみなさん、ありがとうございました。

#### 【記録された鳥】

(清水町剣山神社周辺、豊頃町湧洞沼ほか 5/10)  
ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、スズガモ、ピロードキンクロ、クロガモ、ウミアイサ、キジバト、アビ、オオハム、ウミウ、アオサギ、タンチョウ、オオ

ジシギ、キアシシギ、キョウジョシギ、シロカモメ、オオセグロカモメ、トビ、コゲラ、アカゲラ、モズ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、カワガラス、アカハラ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、イカル、アオジ、オオジュリン

以上47種

(豊頃町茂岩、浦幌町十勝太・トイトッキ浜、音更町十勝エコロジーパークほか 5/11)

マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ピロードキンクロ、クロガモ、キジバト、アビ、ウミウ、アオサギ、タンチョウ、オオジシギ、オオソリハシシギ、キアシシギ、キョウジョシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、アリスイ、コゲラ、アカゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、メジロ、オオヨシキリ、ゴジュウカラ、キバシリ、クロツグミ、アカハラ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、ビンズイ、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、アオジ、オオジュリン

以上54種

【参加者】赤沼礼子、五十嵐加代子、池田みちえ、石橋和子、岩崎孝博、内山純一・雅子、大表順子、岡部良雄・三冬、北川博一、坂井伍一、佐々木裕、志田博明、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、白澤昌彦、高橋きよ子、高橋良直、高正みちえ、立田節子、田中志司子、戸津高保、中正憲信・弘子、中村 隆、西尾京子、温井日出夫・潤子、畑 正輔、濱野由美子、早坂泰夫・みどり、原 美保、松原寛直・敏子、村上茂夫、村田睦子、山川美香、山本昌子、吉田慶子、吉中久子、鷲田善幸・幸江

以上46名

【担当幹事】坂井伍一、佐々木裕、島田芳郎、清水朋子、高橋良直



十勝方面宿泊探鳥会 2014. 5. 11 豊頃町茂岩

## 千 歳 川

2014. 5. 18

札幌市清田区 竹内麟太郎 (小学4年生)

ぼくが、今日一番見てすきだったのは、オオルリです。なぜかというオスの頭が青でかっこよかったからです。メスは茶色っぽい色でよかったです。ほかによかったのはキセキレイです。あざやかな黄色と黒がよかったからです。今日はそうがんきょうの使い方が分からなくて5羽ぐらいいしかみられなかったけど、つぎのときはいっぴいみたいです。

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、キンクロハジロ、カワアイサ、キジバト、アオサギ、ツツドリ、トビ、オオタカ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、カケス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、アオジ、クロジ

以上36種

【参加者】石田卓也、今村三枝子、白田 正、大坪和憲・ミヤ子、北川博一、栗林宏三、小西峰夫・美美枝、坂井伍一、潮見 諭、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、白澤昌彦、竹内 強・麟太郎、高橋貞夫・芳子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、中村 隆、野村 巖、原 美保、本間康裕、樋口孝城・陽子、広木朋子、松原 宏、松原寛直・敏子、三島 邦、三島千恵子、山本和昭

以上37名

【担当幹事】栗林宏三、白澤昌彦

## 鷺 川 河 口

2014. 5. 25

【記録された鳥】キジ、オオハクチョウ、マガモ、カルガモ、クロガモ、カワアイサ、キジバト、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、コチドリ、チュウシャクシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、コヨシキリ、コムクドリ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、オオジュリン、ドバト

以上32種

【参加者】荒木良一、五十嵐加代子、小山内恵子、門村徳男、川東保憲・知子、岸谷美恵子、北山政人、栗林宏三、坂井伍一、潮見 諭、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋良直、田中洋行、中正憲信、中田勝義、蓮井 肇、原 美保、樋口孝城、平川久美子、本間康裕、松原寛直・敏子、横山加奈子

以上27名

【担当幹事】門村徳男、北山政人

## 野幌森林公園（夜の探鳥会）

2014. 5. 31

札幌市中央区 片見 尚宏

今回、探鳥会に初参加させていただきました。更に自分としては初めての夜の探鳥、という事もありとても楽しみでした。集合場所へ行くと、初めての自分にとても親切丁寧な皆様の対応で、すぐに馴染むことができました。

当日は気温が高く、夕方を過ぎても気温が下がらず絶好の探鳥会日和。説明の後、園内へ。今日は見る探鳥ではなく聞く探鳥、これまた風情があっていいですね。しばらくはキビタキの声を聞きながら歩き、気が付けばツツドリやオオルリ、ヤマシギの声も。案内役の方が、自分には気が付かなかった鳴き声も、とても分かりやすく丁寧に解説してくれてとてもためになりました。

辺りが暗くなり、うっすらと見える木々の輪郭が幻想的で、聞こえる物音や地面の感触など、普段明るい時間の探鳥とは感じ方が違い、それも楽しむことができました。途中ベンチで耳を澄ませていると、「ゲゲゲ」と空飛ぶ蛙？いや、たぶんカモ類の音が・・・

その後はパタリと鳴き声が聞こえなくなりましたが、暗闇の中、上を見上げると木々の葉の間に星が輝いており、とてもきれいでした。

最後は明かりの下で鳥合わせをして解散。とても楽しく有意義な時間となりました。皆さん、そして野鳥さん、ありがとうございました。

【記録された鳥】ツツドリ、ヤマシギ、ハシブトガラス、ウグイス、ヤブサメ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ  
以上8種

【参加者】内山英晋、小島俊幸、片見尚宏、川東保憲、栗林宏三、小西美美枝、坂井伍一、漆崎 修、戸津高保・以知子、畑 正輔、松原寛直・敏子、矢野充子、山本康裕  
以上15名

【担当幹事】戸津高保、畑 正輔

## 植苗ウトナイ

2014. 6. 1

札幌市中央区 足助瑠美子

雲ひとつない、とても良いお天気の日曜日、野鳥愛護会の探鳥会に初めて参加させていただきました。

小さな駅に電車が走る植苗、野鳥たちの声も聞こえてきて、のんびり旅行かハイキング気分です。

ところが、6月にはいったばかりだというのに気温はぐんぐん上がっている様子。アスファルトの歩道を歩いているとジリジリ照りつける日差しの強さに、どうなっているの～と驚いていましたが、木の生い茂るなかに入るとだいぶ涼しくなりホッとひと息つきました。

入り口にはスズラン、さらに歩くとピンク色のつぼみがかわいいベニバナイチヤクソウ、それからほぼ満開のエゾノコリンゴの白い花（全部会員の方たちから教えていただきました）。お花も色々咲いていて、目も耳も楽しませてもらいながら歩みを進めて行きました。

そしてそして、綺麗な声の主キビタキの姿をついに発見！光があたって本当にあざやかに黄色をバッチリ見ることができました。さらに奥に入ると、川がありコチドリがあつちにチョコチョコこっちにトコトコめまぐるしく動いています。奥の方にはオジロワシの姿がどっしりと見え、そのコントラストがなんともたまりません！

草原にはシマアオジ・・・は、いませんでした。個人的にはベニマシコが見られたのがとても嬉しかったです。自分で見つけると、本当に嬉しくて「赤い鳥が！赤い鳥がそこに！」と、わかりにくい知らせ方で周りの方を困惑させてしまったような・・・どうもすみません。

お昼ご飯を食べながら、鳥の出現を待ちましたが、飛行機が飛んでも「いまのは〇〇航空じゃない？」などと、双眼鏡をのぞかずにいられない、そんな野鳥好きの習性がなんだかとても好きです。

気さくな愛護会のみなさんに色々教えていただき本当に楽しい時を過ごすことができました。どうもありがとうございました。

【記録された鳥】コブハクチョウ、キジバト、アオサギ、ツツドリ、カッコウ、コチドリ、トビ、オジロワシ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、オオヨシキリ、コヨシキリ、クロツグミ、ノビタキ、キビタキ、オオルリ、スズメ、カワラヒワ、ベニマシコ、アオジ  
以上27種

【参加者】足助瑠美子、阿部真美、今村三枝子、白田 正、川東保憲、河野美智子、小西峰夫・美美枝、坂井伍一、品川睦生、清水朋子、高橋良直、田中 陽・雅子、戸津高保・以知子、畑 正輔、浜野チエ子、広木朋子、藤田 潔、本間康裕、松原寛直・敏子、三井 茂、山下富雄、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、鷺田善幸  
以上29名

【担当幹事】田中 陽、鷺田善幸

## 厚 別 川

2014. 6. 8

岩内郡共和町 岩井 茂

遠方から探鳥会に参加するので、いつも時間のやりくりが大変である。しかし鳥を見つけた喜びは何物にも代えがたく、機会があれば何度でも探鳥会に足を運びたい。

厚別川を訪れたのは今回で二度目。前回は日本野鳥の会札幌支部主催の探鳥会だった。その時印象に残っている事は、カッコウが目の前を飛んだり、アリスイを初めて見て驚いた事だった。かれこれ7年前位になったので

あろうか。記憶の中では、今も脳裏に焼きついている。

朝6時に共和町の自宅を出発して、眠気覚ましのコーヒを飲みながら、目的地の川下公園へとドライブする。途中アカシアの花や植田の清々しい景を見遣りつつも、雨がパラパラと降り始めていた。果して探鳥会が行われるのか、とても気になっていた。

高速道路を利用して、午前8時20分頃に到着。持参したおにぎり朝食を摂ると、カッコウの鳴き声が聞こえた。「雨の中でも鳴くんだな」と感慨に耽ると、雨が本降りになってきた。車の中から傘を取り出して出発。初めての雨の探鳥会。

川下公園から厚別川の土手を歩くと、雨ながら野鳥の音が聴こえたり、スコープ越しに姿が見える。キジバトの番いが舞ったり、アカシアの花咲く森の上をオオジシギが飛んだり、オオヨシキリやコヨシキリが頻りに鳴いている。ノビタキやアオサギ、建設重機に止まっているホオアカも愛くるしい表情を見せる。あいにくの天気の中での探鳥会だが、野鳥たちの元気な姿を見せているのは、何よりも嬉しくもあり頼もしかった。

約2時間程厚別川の両岸を歩いたが、鳥合せの結果を聞いて案外多くの野鳥が来ていた事や、素人の私が聞き逃していたアオジやアカハラの幽かな囀りを確認していたのにも驚いた。

探鳥会解散後も雨の止む気配は一向になく、車中で昼食を済ませて一路帰宅した。雨の探鳥会という珍しい経験をした喜びと、ぜひ機会があれば参加したいという思いを感じながらの運転だった。今回の探鳥会に参加した皆様との縁を大切にしつつ、ペンを擱きたい。

【記録された鳥】キジバト、アオサギ、カッコウ、オオジシギ、トビ、モズ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、シジュウカラ、ヒバリ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、アカハラ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ  
以上22種

【参加者】秋山洋子、今村三枝子、岩井 茂、坂井伍一、沢田浩一、品川陸生、島田芳郎、清水朋子、高橋利道、戸津高保、中正憲佑、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、本間康裕、松原寛直・敏子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子  
以上21名

【担当幹事】品川陸生、原 美保

## 野 幌 森 林 公 園

2014. 6. 15

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、キジバト、アオバト、ツツドリ、トビ、コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、クロツグミ、キビタキ、ニュウナイスズメ、アオジ  
以上18種

【参加者】秋山洋子、井上公雄、大賀 浩、片見尚宏、栗林宏三、小西美美枝、坂井伍一、佐藤美榮子、漆崎 修、品川陸生、清水朋子、辻田捷紀、戸津高保、蓮井 肇、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、辺見敦子、山本昌子  
以上19名

【担当幹事】品川陸生、早坂泰夫

## 福 移

2014. 6. 29

札幌市北区 大内 和憲

石狩の大河をゆらす青嵐

葎切のよじりて鳴けり葦の上

青鷺の首しなやかに巣立ちけり

探鳥会当日は風が強く、「青嵐」が吹く日であった。福岡藩からの移住者が開拓したこの地域には、あばれ河と言われる石狩川があり、肥沃とは思えないこの地での開拓は悲惨さを極めたと思われ心を痛めた。

牧草地では探鳥会のメンバーの前に後ろに小葎切、小椋鳥そして頬赤がヒナの声も混ぜながら囀っていた。小流れには早くも塩辛とんぼが羽根を休め、流れの底には、田螺が流れに逆いながら石にへばりついていて。時に大型の青鷺が首をのばし大きな羽根を蒼空にゆっくりと羽撃かせ森の方を目指していった。空中で小水が糞を飛ばしたのか飛沫が大きな爆発音と共に飛び散り青鷺と共に消えてしまった。

私は生きる全ての生命が愛らしく、いとおしく思う。この生物の命の輝きを心の底に深く秘めるのでなく、俳句という文芸で、文字に遺していきたいと思い今回探鳥会に参加した。命の輝きを伝えるためには、写真であれ文字であれ遺して伝えていく事が必要であろう。

皆さんも五・七・五の17文字の力を信じて俳句で命の輝きを表現してみませんか？

【記録された鳥】マガモ、キジバト、アオサギ、カッコウ、ウミネコ、トビ、アカゲラ、ハソボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、ウグイス、コヨシキリ、コムクドリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、オオジュリン  
以上21種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、五十嵐優幸、井上公雄、今村三枝子、岩崎孝博、大内和憲、小島俊幸、加藤西湖、加藤睦子、香内 実、小西峰夫・美美枝、小堀煌治、坂井伍一、潮見 諭、品川陸生、島田芳郎、清水朋子、高橋宣子、高橋良直、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、徳田恵美、戸津高保、畑 正輔、原田太郎・恵子、原美保、樋口孝城、本間康裕、松原寛直・敏子・優宇、丸

鳥道子、山口ちひろ、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎

以上42名

【担当幹事】田中 陽、辻 雅司

## 野幌森林公園

2014. 7. 13

【記録された鳥】キジバト、アオバト、ツツドリ、トビ、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグ

イス、ヤブサメ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、キビタキ、オオルリ、イカル、アオジ

以上20種

【参加者】秋山洋子、五十嵐加代子、井上公雄、今村三枝子、大賀 浩、太田敏枝、笠井好美、川村宣子、栗林宏三、グローズ千鶴子、桑原みは子、後藤義民、坂井伍一、品川睦生、清水朋子、高田征男、竹内 強、中正憲信・弘子、野田貴代子、畑 正輔、早坂泰夫、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、三輪礼二郎、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子

以上30名

【担当幹事】後藤義民、竹内 強



### 【宮島沼】

2014年10月5日(日)

宮島沼は、ユーラシア大陸の北東地域で繁殖を終えて夏を過ごしたマガンの渡りの中継地として重要な場所です。例年9月下旬から渡来が始まり、この時期にピークを迎えます。マガンのほかにも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。少数ですがシギ類も見られることがあります。時には猛禽類が上空を飛び、水面の鳥たちが一斉にぞわめくのも見もの一つです。湖畔から沼を見るだけで移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせを行い、自由解散となります。天気が良ければ駐車場横で昼食をとることもできます。

集 合：午前10時

交 通：中央バス 岩見沢ターミナル発（月形行）  
または月形駅発（岩見沢行）  
大富農協前下車 徒歩10分

### 【野幌森林公園】

2014年10月12日(日)、11月2日(日)、12月7日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥はほとんど去り、カラ類やキツツキ類などの留鳥が主体となりますが、12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。大沢園地で昼食、午後1時頃には大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 午前9時

交 通：夕鉄バス 新札幌駅発（文京台南町行）  
大沢公園入口下車 徒歩5分  
JRバス 新札幌駅発（文京台循環線）  
文京台南町下車 徒歩5分

### 【ウトナイ湖】 2014年11月9日(日)

晩秋のウトナイ湖にはこれから南に向かったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。オジロワシが対岸の木に止まっているかもしれません。湖岸をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、同じ場所で昼食をとることになります。

集 合：野生鳥獣保護センター前 午前9時30分

交 通：道南バス 新千歳空港発（苫小牧行）  
ウトナイ湖下車 徒歩5分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ちください。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465  
午前10時～午後4時(土日、祝祭日を除く。)

## 鳥民だより

### ◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前入りカレンダーを販売します（1部1,200円）。お渡しは11月ウトナイ湖探鳥会と12月野幌森林公園探鳥会となりますので、申込時に受け取り場所をお知らせください。

申し込み先 品川 011-571-6915

小堀 011-591-2836

### 【新しく会員になられた方々】

梅津 清栄（札幌市北区） 瀬川 睦（江別市）

潮見 諭（札幌市南区） 野村 巖（札幌市清田区）

林 茂雄（札幌市豊平区） 竹内 正・恵美子（札幌市東区）

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>